The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『玉あられ』から『遠鏡』へ
Author(s)	山根木, 忠勝
Citation	語文. 1982, 40, p. 12-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『玉あられ』から『遠鏡』へ

山根木忠勝

一、はじめに

本居宣長は『古今集遠鏡』の例言のはじめの部分に、

○うひまなびなどのためには、ちうさくは、いかにくはしくときたるも、物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふがごとは、さとりえがたき物なるを、さとびごとに譯したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言みな、おのがはらの内のものとしなれば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝことおほきぞかし、

と俗語訳についての自らの所見を述べている。これは、初学者にとっては学問的にどんなに詳しく説かれた注釈よりも、日常語で訳されたものがあればその方がより直接的で理解しやすく、歌の内容のみならずその心情までも捉えることができるというのである。これはまた晩年の古典教師としての宣長が、いかに入門期の弟子達に与えるテキストに心をくだいていたかを物語るものと思われる。本稿は、この「○うひまなびなどのためには」に注目し、『遠鏡』が『古今集』という一古典文学作品に対する宣長の解釈の全体像を示す注釈書・訳書として書かれたのではなく、先行する『玉あられ』の「説き事」の内容を一歩すすめて、初学者用に具体的な作品の中でその解釈を試みたもの、すなわち『玉あられ』の実地踏査であり、しかも鈴門のすべての古典教育課程の根底をなすテキストという役割を担って執筆され、『玉あられ』刊行の翌年（寛政五年）一気に書き上げられたのではないか、との推測のもとに論をすすめようとするものである。

二、『遠鏡』執筆の時期

筑摩書房版『本居宣長全集』（以下『全集』と略す）第三巻の「解題」によれば、筆者大久保正氏は『遠鏡』の執筆時期について次の二つの事実から、寛政四年～同六年一月までの間、恐らくは寛政四、五年の間に成稿したものと考え、それ以上の確定は困難とされる。すなわち、

①『遠鏡』の草稿のうち、板本の「例言」とほぼ同内容・同項目・同文章のものが、『玉あられ』の校正刷の裏面九葉を使用して書かれている。従って『玉あられ』の刊行年である寛政四年以後であることは間違いない。

②寛政六年正月十日、横井千秋に宛てた宣長の書簡に、

「舊冬之御返事

一、遠鏡板下の儀、外に宜き筆者思召付御座候由、被ニ仰聞一候御趣、承知仕候、いかやうとも御もやう次第、可レ然やうに御取計可レ被レ下候、」

とあるから、正月十日までには成立していた。

確かにこの二年間という幅を持たせた説は穏当ではある。しかも成稿の時期であるから、いつごろから執筆を始めたかについては全く言及していない。（ただし執筆の開始も寛政四、五年のどちらかと考えても何ら抵触しない。）私は更に三つの根拠を追加することによって、その執筆・成稿の時期が一層限定できると思うものである。すなわち、

①寛政五年五月十六日、横井千秋宛の書簡によれば、〈注1〉

「一、古今集遠鏡之儀、仰之御趣承知仕候。此節ケ様之義もいまた一向ニ得取掛り不レ申候。」

とある。この年、宣長は三月十日松坂を出発して上京、四月十二日京を立って近江、美濃に立ち寄り、十六日名古屋着。ここで横井千秋に会い、二十五日名古屋発、二十九日松坂帰着という長旅の後の、千秋へのお礼を兼ねての手紙である。ここの「仰之御趣」というのがはっきりしないため、『遠鏡』の執筆済の部分の内容についてあれこれ要望を出したという推測も可能だが、執筆途中から原稿を見せていろいろと意見を聞くとも思えない。ここは、「例言」の「尾張の横井千秋ぬしの、はやくよりこひもとめられたるすぢにて、はじめよりうけひきては有ける物から、なにくれといとまなく、事しげきにうちまぎれて、えしもはたさず、あまたの年へぬるを、いかに〳〵と、しば〳〵おどろかさるるに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつる」という記述に対応させて「いかに〳〵」ととる方が妥当ではあるまいか。そう考えたならば、手紙の次の部分「ケ様之義もいまた云々」もすっきりと了解できよう。従って五月十六日の時点で、まだ執筆していなかったということになる。

②寛政五年十一月十一日、横井千秋宛書簡に、〈注2〉

「一、先便古今集譯ノ書、さし上申候處、御落手被ニ成下一、思召ニも相叶申候御趣、御細書御丁寧之御儀、私も大慶奉レ存候。呉々思召ニ叶申候段、悦敷奉レ存候。尚又右扣本別ニ壹部御寫させ可レ被レ下旨、御願申上候所、御承知被ニ成下一、早速御寫させ可レ被レ下由、忝奉レ存候。（中　略）

一、古今遠鏡愈御藏板ニ被ニ仰付一、早速御彫刻可レ被レ成旨、被ニ仰下一殊更記傳之通り、上彫ニ可レ被ニ仰付一由、別而仕候。」とあり、この時点で成稿していたと思われる。

③『全集』第十一巻「補注」の、『古事記傳』初稿本について二、と題する資料によると、宣長の『古事記傳』各巻執筆の時期がつぶさにわかる。当該時期の執筆の様子をみると次の如くである。

三十二之巻　寛政四年閏二月十一日始
　　五月卅日了
三十三之巻　寛政四年五月卅日始

十月十三日了
三十四之巻〈注3〉　寛政四年十月十八日始
五年正月廿四日了
三十五之巻　寛政五年九月廿三日始
十一月十二日了
三十六之巻　寛政六年二月二日始
三月廿一日了
（中　断）
寛政七年六月八日了

一つの巻を終えてから次の巻へ移る間隔はそれほど空いていないのが普通であるのに、三十四之巻から三十五之巻へ移る際は、約八ヶ月間執筆を中止している。当然、この寛政五年正月〜九月までは、比較的他の著作にかかわるチャンスがあったということである。

更に宣長には、この時期に古今集関係の執筆を始めるとしたならば、それ以前に積み重ねてきた充分な準備が整っていると見ることができる。寛政四年十月八日〈注4〉（『全集』解題は十八日とする）から宣長は四回目の古今集講義を開講し、これは寛政七年まで続いている。四回目でもあり、かつまた彼にとっては『古今集』の歌は、契沖の『余材抄』以来の研究対象でもあり、その解釈は自家薬籠中のものであったろう。現に『詞の玉緒』において語法の例として挙げた歌が『古今集』の歌をほとんど網羅しているといった数に上っているのも思いおこされる。

このように、既にストックともいうべきものが充分あり、現にこの時点で講読を継続中でもあった『古今集』の俗語訳は、その訳出にあたっての基本原則さえはっきりと確立されておれば執筆にそれほど時間がかかるとは思えない。内容が極めて高度なものでなく、言い回しにそれほど神経を使わなくてすむ啓蒙的なものであるならば、宣長はごく短時間で書き上げることができたはずだ。たとえば『宇比山踏』を十二日間で書き上げていることを想起すれば十分であろう。（『全集』で二十八頁分の量である。『古今集』の訳の方は対象がすでに決まっており、解釈は既に経験済みであるから、後はむしろ機械的な作業である。従って『宇比山踏』と同じ一日二・三頁分の速度でいくと、四か月あれば『遠鏡』の分量は十分書けると計算できる。）

依って、構想日時はともかく執筆時期は、寛政五年五月下旬以降早くて九月下旬、遅くて十一月上旬に到るまでの間と考えたい。

三、『玉あられ』に見られる『古今集』指向

ところで、先行する〈注5〉『玉あられ』は、近き世の人達の語法・意味の認識の誤りを正すという目的の明確さ、「古へ」の歌文の例を引き結論のみを要領よく示したので、初学者はこれによって得るところきわめて大きかったようである。またそれ迄にこのような類書が乏しかったのか、宣長の企画が大いに当たって出版界に大きな反響を巻きおこした。刊行〈注6〉の年に、加藤千蔭の『玉あられ論』や村田春海の『玉霰附論』など批難の書や、類似の趣向の書物が相次いで登場し、それらが一層この書物に対する彼の愛着を強くしたと思われる。（後述する『玉勝間』にも「玉あられ」と題する一項がある。）

この『玉あられ』の内容で顕著なのは古今集重視の指向である。誤用の例を挙げるばあい、その例にする句は、特定の出典から抜き

出したものではなく、古文に頻出する慣用的な語句であるばあいが多い。従って、特定の書物を挙げることはまずなく、本文の中に書名が出てくることはごく僅かである。にもかかわらず『古今集』という名はよく出てくる。やはり「古へ」の一つの基準と考えてのことであろう。『古今集』の歌を引用するときは、他の例のように一句のみを引くのでなく、一首全体あるいは上の句ないし下の句を引いている。このような丁寧な引用は他に、『後撰集』[注7]と『千載集』からの各一首のみである。

このような『玉あられ』の好評と古今集重視の姿勢は必然的に入門テキスト第二弾として、『古今集』の方へ執筆の意向が向かわざるを得ない。『遠鏡』の執筆を勧めた横井千秋への何通かの手紙にはその様子が垣間見える。

○「一、先達而玉あられさし上申候處、被レ入二御念一候御紙面、拝見仕候。本仕立あまり悪クも不レ被二思召一候段、被二仰下一大悦仕候。此書ハ京都ニ而も、別而能廣マリ申候由、追々承り、大悦仕候。此節ハ定而御地書林へも廻り可レ申と奉レ存候。」(寛政四年六月五日)[注8]

○「一、玉あられノ内、思召寄り被二仰下一辱奉レ存候。右ノ内八丁オ八行メ、煙コレハ烟ヒ書申候故、是ニ而も宜御座候。其餘ハイツレモ被二仰下一候通、誤ニ而御座候。直させ可レ申と奉レ存候。思召寄忝奉レ存候。」(寛政四年六月廿六日)[注9]

○「一、遠鏡二冊被レ遣、此度返上仕候。右二冊之内、所々御考之御入レ紙一々拝見仕候。惣體此書ハ注ニ而ハ無二御座一、只譯を主と致し候事故、注ハ加へ不レ申、其内格別之事アレバ、たま〳〵ハ注ノ如キ詞も加へ申し候へ共、先ハ注ハ加へ不レ申候積リ也。心得ニ可レ成事共を加フル時ハ、殊外事長く相成候故、先注ノ如キ事ハ加へ不レ申候。夫故此度之御入紙之分も多くハ略キ申候。其内ニ朱ニ而△印付申候分ハ、細書ニ御書加へ可レ被レ成候。右之印無レ之分ハ、御捨被レ成可レ然奉レ存候。尤細書ニト申候わけハ、此書貴公様御方ニ而御上木被レ成候事故、貴公様御自分ニ御書加へ被レ成候事故、細書ニト申候也。

一、右遠鏡板下ハ、二ノ巻ゟ御認可レ被レ成由、御尤ニ奉レ存候。いかやう共御もやう次第可レ然奉レ存候。

一、遠鏡ニ付、呉々追々御考も出可レ申候へ共、惣体かやうの事ハ考へ候へハ、呉々と追々出申候物ニ而、いつ迄も盡キ不レ申物ニて、御座候へハ、大体よき程ニ而、事ヲ御決し板下御認被レ成可レ然奉レ存候。

一、玉あられ難文之儀、京都蘆庵と申候ハ相違ニ而、蘆庵ニ而ハ無二御座一、江戸表ノ人ニ而御座候。江戸ゟ參申候作者ハ相知レ不レ申候。此方ゟ返答ハ三井高蔭書申候。」(寛政七年正月廿日)[注10]

寛政七年の手紙は『玉あられ』の難文出来と千秋の『遠鏡』熟読ぶりがうかがわれ、宣長にとって弟子であり熱心な読者である千秋が、常に『玉あられ』から『遠鏡』への媒介として存在している。なお『遠鏡』の成稿の時期と思われる寛政五年十一月九日の、千家俊信宛の書簡に、宣長は次のように書いた。[注11]

「一、子供素讀之儀、先一番に古今集をよませ申候而宜御座候。古事記宜御座候へ共、是は漢文漢字故、返而よろしからず。先古今集宜御座候。其後に儒書をよませ候が宜御座候。儒書は何點ニテモ宜御座候。」

この言葉こそ、宣長の『遠鏡』執筆の動機と、完成後の用途を雄

弁に物語っているのではなかろうか。

四、『玉あられ』の語釈の『遠鏡』への適用

『遠鏡』の俗語訳に関して、永野賢氏〈注12〉は「ぞ」「こそ」「も」という三つの係助詞についてどのように訳されているか、その実態を調査された。それによると、歌の心を生かすべく「文学的俗語訳」とでもいいうる訳の方式を「第一原則」、それとは逆に機械的に行う訳の方式を「第二原則」と名付け、その割合を見ると、「ぞ」「こそ」においては圧倒的に第二原則が多く、「も」においては第一原則が多く適用されてはいるが、これは俗語に「も」が何らかの形で残っているためで、第二原則の適用と撞着しないとする。そして、概して第二原則が多く適用され、第一原則を尊重しながら語学的に俗語文法意識として第二原則を確立したところに宣長の功績を認め、この「てにをは」の俗語訳の一般法則化が後世に与えた影響ははかりしれないと結んでいる。

また林巨樹氏ら四氏による助動詞の訳語に関する調査研究は、各各の助動詞の背後に複雑な弁別意識が働いていることを探っていこうとするものであるが、その調査結果を見ると、第一原則の適用が多数という例外や一つの語に対して複数の訳語があたっているばあいがあるものの、ここでも可能な限り、ほぼ機械的に置き換えられているといってよいのではなかろうか。

この上に立って私が指摘したいのは、『玉あられ』歌の部で一例として示された訳語が、ほぼそのまま『遠鏡』で採用されているという事実である。従って永野氏が係助詞について指摘されたような事実が、『古今集』の歌の語、構文のほとんどについて、きまった形であたかも「古文解釈法」とでもいうごとく宣長の意識の中にあったのではないかと思われる。煩をいとわず具体例を列挙してみる。〈注14〉

○物から

(玉)此詞は、古今集夏〻郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから、此下句を、俗言にいへば、〻思ひはすれども、それでもうとまれる、又〻思ひながらも、やッはりうとうとしく思はれる、などいふ意也、又秋上〻まつ人にあらぬ物から初鴈のけさ鳴聲のめづらしきかな、此初二句は〻まつ人ではなけれどもといふ意也、又物名〻あちきなしなげきなつめそうきことにあひくる身をばすてぬ物から、此結句は、〻捨テもせずにゐながらといふ意也、大方これらの歌にて、其意明らかなり、然るを今世の人は、……

147 ほとゝぎすながなく里のあまたあればなほうとまれぬおもふものから

時鳥ヨ　ソチハ　ナク里ガアソコニモコヽニモアマタアツテ
ココバカリデ鳴ヵヌニヨツテ　賞翫ニ思ヒハスレドモ　ソレ
デモウト〳〵シウ思ハレル

206 まつ人にあらぬ物からはつ鴈のけさなく聲のめづらしき哉

待人ガキタカナンゾノヤウニ　ケサ始メテ鴈ノ鳴聲ガサテモ
メヅラシウ思ハレルコトカナ　コチガ待テ居ル人デハナイヂ
ヤケレド

455 あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬ物から

イロ〳〵サマ〴〵ノウイ事ニアフテ來タ此身ヲエステモセズ

ニ居ナガラ　ソノウイ事ノカズ〳〵ヲトリアツメテナゲカウ
事デハナイ　アゝムヤクナ事ヂヤ

○春やきぬらむ

(玉)……〽春はきにけりは、俗語に、〽春がきたわい、といふほどの意、〽春やきぬらんは、〽春が來たかしらぬ、といふ意也、然るに〽春がきたわい、といふべき所を、〽春がきたかしらぬ、といひて聞ゆべしやは、よく思ふべし、

1 年のうちに春は來にけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ

年内ニ春ガキタワイ　コレデハ　同シ一年ノ内ヲ　去年ト云タモノデアラウカ　ヤツハリコトシト云タモノデアラウカ

4 雪のうちに春は来にけりうぐひすのこほれる涙いまやとくらむ

マダ雪ノツモツテアル處ヘ春ガキタワイ　コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ

763 わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらむ

マダソノ時節デモナイニ此ヤウニワシガ袖ヘ時雨ノフツタハ君ガ心ニ秋ガキタカシラヌ　ソレデ此袖ノヌレタハ涙ノシグレヂヤ

140 いつのまにさつききぬらむあしひきの山時鳥いまぞなくなる

イツノマニ五月ニナツタヤラ　ヒゴロマチニ待タ時鳥ガ　今始メテサ　ナクワアレ

○まし

(玉)ましは、ん又べきべしといふと大かた同じ意にて、……(中略)古今集の歌に〽鶯の谷より出るこゑなくは春くることをたれかしらましとあるは、春くることをたれかはしらん、又たれかはしるべきの意也、【俗言にいはば、たれがしらうぞ】然るに今の世初學のともがら、……

14 鶯の谷より出るこゑなくは春くることをたれかしらまし

谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ガナクバ　春ノキタト云事ヲタレガシラウゾ

○ものうき

(玉)ものうきは、俗にいふ、ぶせうにて、何事にもせよ、するこのいやなる意、しともなきといふ意也、然るを……古今集に〽梅枝に物うきほどにちる雪をとあるも、雪のひた〳〵とはふらで、たゞいささかづつちるをいへるにて、俗に〽いやさうにふりともなさうに、ふせう〳〵にふるといふ意、又〽ものうかる音に鶯のなくとよめるも、〽いやさうに、なきともなさうな聲になくといふこと也、これらにて心得べし、

※梅枝に物うきほどにちる雪を

15 春たてど花もにほはぬやま里はものうかる音に鶯ぞなく

春ニナツテモ花モナイ山中ノ里デハ　ナニモハリアヒガナサニ　鳴トモナサウナ聲ヲシテサ　鶯ガナク

○たのめ　たのむる

(玉)……〽逢坂は人だのめなる名にこそ有けれといふは、逢といふ名なれば、定めて逢べきぞと、頼みにさせて、さて逢事はなきをいへり、これらにてもさとるべし、然るを今の人……

390 かつこえて別れてもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそ有けれ

此坂ハ逢坂ナレバ人ニ逢ウハズヂヤニ　此坂ヲコエツヽソシテマア別レテイカツシヤル事カ　コレデハ逢坂ト云名ハ　頼モシサウニ聞エテ　頼ミニナラヌ名ヂヤワイノ　コレガ人ダノメト云モノヂヤ　人ダノメトハ　人ニ頼モシウ思ハセテオイテソシテ其通リデモナウテムダナ事ヲ云ヒマス

この数項以外にも、たとえば「～を～み」の訳は、『玉あられ』によれば「～ガ～サニ」となるが、殆んど「第二原則」が守られており、混同がいくつかみられるのは「～ノ～サニ」というような例である。他に、接続助詞「つつ」、「とく」「とくる」の自他の訳し分け、「もぞ」「もこそ」などに、『玉あられ』から直接流れ出る発想を見ることができる。

更に付け加えておきたいのは、「例言」の各項目が『玉あられ』の一項目に該当するということである。従って、両者の文体ならびに文章構成は酷似している。今一つ例を挙げてみよう。

(玉)詞によりて下を、つるといふべきと、ぬるといふべきとの差別あり、たとへば〻ありといふ詞の下は、必〻有つるとのみいひて〻有ぬるといふことはなし、……(『全集』四七八頁)

(遠)○てにをはの事、そもじは、譯すべき詞なし、たとへば〻花ぞ昔の香ににほひけるのごとき、殊に力ヲを入レたるぞなるを、俗言には、花がといひて、……(『全集』八頁)

この文体は『詞の玉緒』で解説を加える際に用いた文体でもある。第一文で主題となる簡潔な文を提出し、第二文は「たとへば」という語でつないで、具体例を挙げて説得していくのである。このような文章構成の類似も、近接する時期に書かれた二書の緊密な関係を強くあらわしていると思われる。

五、二著書の相違点と共通点

これまで『玉あられ』と『遠鏡』を宣長の著作分野の同一延長線上に置き、その関連を中心に追究してきた。が、ここで二著の相違点も検討しておかねばならないだろう。

『玉あられ』は、その序文で「近き世の此わろきくせを、世ノ人どものさもえさとらで、ただよしとのみ思ひるが、かたはらいたさに、それおどろかまほしくて」というように、擬古文(和歌をも含めて)を書く際の誤用の指摘を目的とする。『玉勝間』〈注16〉六の巻ではそれを、「宣長ちかきころ玉あられといふ書をかきて、近き世にあまねく誤りならへることどもをあげて、うひ學のともがらをさとせるを、のりなががをしへ子として何事も宣長が言にしたがふともがらの、其後の此ごろの歌文に、此書に出せる事どもを、なほ誤ることのおほかるは、いかなるひがことぞや、」と書いているように、特に弟子達の誤用の矯正という教育的意図を強くもっていた。

一方、『遠鏡』の目的は、雅文を書くことではなく、書名にも冠した『古今集』という古典を読むこと、つまり内容を自分のものとしてしっかり把握するという点にあり、同時に本格的な解釈、注釈へ進んでいく糸口を与えるものであり、宣長が『詞の玉緒』等の語法研究でまとめあげた解釈法の具体的実践であったといえる。つまり二著書は英語教育の「グラマー」と「リーダー」のような役割を果たしていた。従って誤解を恐れずに言えば、前者が書くことに中心を置いているのに対し、後者は読むことに中心を置いていると言えよう。

しかしながら『玉あられ』は書くための注意事項を挙げただけではなく、書く前提として雅文の内容の理解を考えて、語法・構文の意味の説明にかなりの部分が費やされている。むしろ書くためと称しながらも、読み方の説明といえばいえなくもないほどである。その結果、語法・構文の留意事項の解説になった傾きがあり、それが前章で述べたように、文章構成の点でも「例言」に酷似している理由ともなろう。他には、共に初学者をその読者としていること勿論である。

六、おわりに

〈注17〉晩年の宣長の著作は学者としての著作の他に、教育者とくに国語教師としての姿勢が強く顕われているように見える。国語教師は誰でも痛感することであろうが、授業の成否は教材の良し悪しと、生徒が理解できたという充実感を持つかどうかにかかっている。従って現場での指導では、確実な研究の裏付けのある成果にもとずいた、ある程度機械的な「割り切れる」知識の適用がむしろ生徒の学習意欲・注意力をひきとめやすいし、効果的だといえるであろう。

この論の後半で既に見たように、宣長の口語訳にはその対応する訳語および構文が存在する。ちょうどそれは現在の古典教育が「をかし」「あはれ」を「趣きがある」「風情がある」、あるいは「つれづれなり」を「所在ない」とかいうふうに、生徒の側からすれば古典の時間以外には使わぬ訳語を今もって対応させているのに似ている。宣長のばあいは、それを特に「てにをは」の面で強調してみせたので、初学者がそれに注意を喚起され、古文の微妙な違いをさぐろうとするようになったという点からいえば極めて重要な功績といえる。助詞・助動詞の弁別が古文の学習で最も重要視されるのは『詞の玉緒』を含めて『玉あられ』や『遠鏡』以来の伝統といえるのではなかろうか。古典教育課程の中での重要性を根拠にテキストとして『古今集』を選んだという点でも、宣長の国語教師としての見識が大いに働いているといえよう。このような作業が独得の「教室国語」をつくりあげるきっかけをつくったことも否めないが、それは無論宣長の責任ではあるまい。これによって『古今集』の歌意が能率的に理解できるようになったという点でまさに画期的で弟子達の学習の精力もどんなに節約されたか知れないのである。

論の前半は、特に書簡を中心として宣長の寛政四、五年の執筆活動の一端を再構成し、宣長がそれまで蓄積した材料を集成して教材『遠鏡』を一気に書き上げた、それも恐らく寛政五年五月下旬～九月下旬ないし十一月上旬くらいの間であると推定してみたのだが、いかがなものであろう。

昨今、大学者としての宣長の評価はいよいよ高くなるばかりであるが、一面国語教師としての宣長の活動を、やはり国語教師としての立場から考えてみたらという観点から筆を執った次第である。

注

〈1〉奥山宇七編『本居宣長翁書簡集』（啓文社、昭9）137頁

〈2〉同右　148頁

〈3〉三十四之巻以降は『全集』第十二巻、補注、433～434頁

〈4〉『全集』第十六巻、日記、447頁に「〇八日　今夕古今集開講」とある。また村岡典嗣『本居宣長』（岩波書店、昭3）も十月八日に始まるとする。（92頁）

〈5〉『玉あられ』序文による。『全集』第五巻、467頁

〈6〉土屋博映の解説〈中島広足『玉霰窓の小篠』（勉誠社、昭53）〉

402〜403頁、あるいは福田真久の解説〈本居宣長『玉あられ』（勉誠社・昭51）〉248頁による。

〈7〉『玉あられ』（『全集』第五巻、486頁）

〈8〉〈1〉の125頁

〈9〉〈1〉の127頁

〈10〉〈1〉の180〜181頁

〈11〉〈1〉の144頁

〈12〉永野賢「本居宣長『古今集遠鏡』における〝てにをは〟の俗語訳の原則とその適用の実態」（『東京学芸大学紀要』第2部門第26集、一九七五年）

〈13〉林巨樹ほか「江戸中期の国語について——古今集遠鏡訳文の助動詞研究——」（『青山語文』10、昭55）

〈14〉波線部は筆者で入れた。語釈の両書に共通する部分を表わしている。また××××の記号は『玉あられ』の訳語が適用されていない部分である。（玉）は『玉あられ』、和歌の冒頭の番号は国歌大観歌番号。

〈15〉『新古今集』28の誤記か。

〈16〉『全集』第一巻、199〜200頁

〈17〉岡部政裕「宣長と平均的國語教師」（『全集』第三巻、月報）を参考とした。

その他の参考文献

山口明穂「江戸時代における古典解釈と言語意識」（『東京大学文学部研究報告』7、昭57年）

同　右「尚古・擬古意識と文体史へのその反映」（『講座日本語学7』、明治書院、昭57）